

3月第1週の礼拝説教

■日 時：2023年3月5日（日）10：30－11：30 受難節第2主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「彼らの心を見抜いて」

■聖 書：ルカによる福音書 11章 14～26節（新約 p128）

■讃美歌：16「われらの主こそは」 303「丘の上の 主の十字架」

先週の日曜日から「受難節の主の日」になりました。今年の受難節は2月22日の「灰の水曜日」から始まって、主の日である日曜日を除いてイースターの前日までの「40日間」です。その関連で、先週は主イエスがお受けになった「40日間の悪魔からの誘惑」をご一緒に考えました。そこで主イエスは、40日間の断食の後の空腹状態で、パンに代表される私たちの命を保つための食べ物の誘惑、広く考えるならば私たちが生きていく上で必要不可欠な衣食住全般に関する誘惑とも考えられる第一の誘惑を受けられました。第二にはこの世のすべての国々の権力や繁栄を手中に収めるという誘惑、そして第三の誘惑は神を試すというものでした。特に第三の誘惑は、私たちにとっても非常に考えさせられるものです。あなたが信じている神様は本当におられ、いつもあなたを守り導いて下さるのか、神様を全面的に信頼して大丈夫なのかと、悪魔は私たちに事あるごとに囁いているのではないのでしょうか。それらの誘惑の頂点に位置しているのが、主イエス・キリストの十字架上の受難と復活です。マタイによる福音書 27章 40節には、十字架に架けられた主イエスに向かって、通りかかった人々が「神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」とののしる場面が描かれています。まさに、40日間の荒れ野の誘惑の中で悪魔が主イエスに呼びかけた、「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。」という言葉と非常に似ています。しかし、ここでも主イエスの答えは、全面的に主なる神に信頼を寄せるものでした。この主イエスの姿勢から私自身が深く考えさせられたのは、今年の受難節こそ、聖書の御言葉によって悪魔に勝利された主イエスに私たちも倣いたいということです。日常生活の些細なことの中にも、悪魔は私たちに誘いの言葉を囁いてきます。そのときにこそ、主イエスの御言葉を思い出したいと願っています。

さて、先ほどはルカによる福音書 11章 14節から 26節を読んでいただきました。主イエスが悪霊を追い出されたことが語られています。そこで私たちは、主イエスを誘惑した悪魔とここに出現してきた悪霊とはどのように違うのか、という素朴な疑問を持ちます。一般には、悪魔（ディアボロス）は悪霊（ダイモン、ダイモニオン）や諸霊の首領と考えら

れています。ですから、悪霊は悪魔のために働く存在と言えます。本日の聖書箇所では「悪霊」が登場してきます。それは口を利けなくする悪霊でした。主イエスはその悪霊を追い出すと、口を利けない人がものを言い始めたのです。しかし、私たちは悪霊という存在を身近なものとして信じることはできません。ですから、この人は心の病あるいは極度のストレスによって口を利くことができなかつたのだが、主イエスが彼の心を抑圧から解放して癒し話せるようにしたのだ、と理解しようとしています。そして、この箇所で描かれる群衆たちは、主イエスの悪霊追放の奇跡を見て初めは驚嘆しました。けれども、その中のある者は「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言い出しました。ここに、悪霊の頭の名前が出てきています。ヘブライ語でゼブルは「住居」を意味しますし、ベルはバビロンの守護神であったようです。旧約聖書ではバアルと呼ばれることもあります。つまり、ベルゼブルは「居住の主」という意味になります。ですから、まさに悪霊の頭が手下に住居から「出ていけ」と命じているのだ、と考えたのでしょうか。また、ある者は主イエスを試そうとして、天からのしるしを求めました。主イエスの悪霊追放の力がどこから来たのかを確かめたいと思ったのです。「天からのしるし」とは、主なる神様からの力が働いているという証拠と言い換えることができるでしょう。それを具体的に示してくれるなら、あなたの力が神様によるものであると認めてやる、と言ったのです。ここまで話を読み進めるうちに、私には、ここでの悪霊の仕業とそれに対する主イエスの神の指での悪霊追い出しという御業、そして、主イエスを試そうとする群衆の動きが、40日間の荒れ野での主イエスと悪魔の戦いに似ているように見えてきたのです。

ところで、17節では「しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。」と記されています。悪霊は、少しでも隙があれば、私たちを虜にして支配下に置こうと狙っているのです。ここに出てくるのは口を利けなくする悪霊です。そして、実はその場にいる多くの群衆もまた悪霊に捕えられており、彼らは主イエスに対して敵対する言葉を投げかける者とされていたのではないのでしょうか。それを主イエスはしっかり見抜いておられるというのです。なぜなら、主イエスはすでに40日間での悪魔の誘惑に勝利しているからです。17節、18節の「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。18 あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。」という御言葉を読みますと、現在、世界のあちらこちらで起こっている戦争や紛争を考えずにはおられません。また、悲しいことですが、私が牧師として召されてからの30年以上の間にも、内輪もめのために教会が消えてしまったり、存続が危ぶまれていたりする場面をいくつも見聞きしてきました。

このことは、24 節から 26 節の「**汚れた霊が戻って来る**」という箇所にも関連します。私はある時、悪魔が最も住み心地が良くて力を発揮するところはどこか、という話を聞いたことがあります。それは教会であるというのです。主イエスによって教会に集められ、悩みや苦しみから救っていただいて、自分をきれいに掃除し、整え、新しく歩み始めたのが、キリスト者と呼ばれる一人一人です。しかし、そこに主イエス・キリストを本当の意味でお迎えしていなかったら、それは、一度は出ていったはずの汚れた霊が戻ってくるのに非常に適した状態になっているというのです。その家は結局、出ていった汚れた霊がより強い七つの霊を連れて来て中に入り込んで住み着いてしまう、と主イエスは警告します。コリントの信徒への手紙一 6 章 19 節、20 節では、そのことを一人一人のこととして次のように記されています。「**知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。**」神様は私たちを、本来は聖霊の宮として神様の聖なる霊の住まいとして造って下さいました。それを思い起こすようにと、私たちは主イエスの十字架という代価を払って買い取られたのです。それが、受難節に覚える「主イエスの十字架による贖いの御業」ということになります。だからこそ、私たちがその神様によって造られた本来の祝福された人間として生きるためには、主イエス・キリストを主人としてお迎えし、主イエスに宿っていただくことが必要なのです。そして、主イエスを心から喜んでお迎えするときに、ルカによる福音書 11 章 20 節の御言葉が私たちのうちに成就するのです。「**しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。**」に励まされながら、今週も新しく歩みましょう。